

# 『付加価値のある留学』体験談 特別支援教育のスペシャリスト 大曾根阿貴さん



日本の大学と大学院で児童心理学や教育心理学の知識と経験を積んできた大曾根さん。大学の教授の勧めで参加したケニアでのボランティア活動などを通して、自分の英語力をもっと伸ばし、海外での児童教育、特に特別支援教育に関する経験を積みたいという希望でニュージーランドに渡航されました。

## ■大曾根阿貴様のための“付加価値のある留学”スタディーツアー

ご依頼内容： ニュージーランドの特別支援教育の仕組みや実情をよく理解し、幼稚園から小学校、小学校から中学校への情報の伝達や教師と補助教員との連携、地域との連携など、日本で感じてきた問題点がニュージーランドではどうなっているかを知りたい。

訪問場所	スタディー内容
現地公立幼稚園	<ul style="list-style-type: none"> <li>・NZ 独自の幼児教育テファリキの見学</li> <li>・具体的な特別支援教育の実例</li> <li>・特別支援が必要な園児との交流</li> <li>・現地幼稚園の園長先生から直接お話を伺う</li> </ul>
現地公立小学校	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学校での特別支援の仕組みと実例を学ぶ</li> <li>・現地小学校の教頭先生から直接お話を伺う</li> <li>・補助教員の先生から直接お話を伺う</li> <li>・健常児と障害児が共に学ぶクラスの見学</li> <li>・特別支援が必要な児童との交流</li> </ul>
特別支援プログラム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・現地小学校の中にある特別支援施設の訪問</li> <li>・主任の先生から直接話を伺う</li> <li>・NZ の特別試験教育の現状と理解質疑応答</li> <li>・特別支援教育テストの体験</li> <li>・特別支援教育課題の理解と体験</li> </ul>

## Q1: 特別支援教育分野のご留学を目指されたきっかけは？

大学では現代社会学を専攻していましたが、そこで子どもに長年たずさわっている教授に出会い、ケニアのスラム街や養護施設に一度連れて行っていただき、それまで漠然としていた子どもにかかわる仕事をするというのが明確になりました。同時にしゃべりたい・話したいことは多々あったのに英語が喋ることができず、コミュニケーションが取れなかったのが悔しくて、英語を勉強したいと思い始めました。

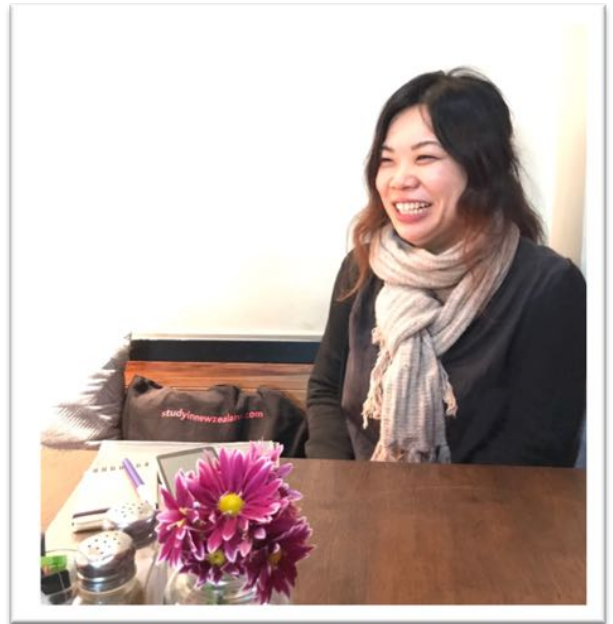
卒業後は、大学院(二年間)に入り、児童学(主は児童心理学)を専門に勉強しました。並行して、公立小学校の特別支援学級で二年間実習もしていました。

教職関係の資格は持っていませんが、就職は、臨床発達心理士という資格を生かし、市の教育委員会の教育相談員(市の小学校の普通学級に入り、発達障害、知的障害児の授業中のサポートや担任教諭のサポート、また幼稚園で親御さんの相談のカウンセリング)、保健センターで就学前の乳幼児の親子相談・小集団のグループ教室・健診の心理相談、特別支援アドバイザー(幼稚園～高校まで、その学校に伺い、授業を観察して、放課後に対象のお子さんの指導方法を先生方と協議をする)仕事をしていました。

仕事で充実感を感じる一方どうしても自分が話したいことを英語で自由に話して、もっともっと海外に視野を広げたいという希望がずっとあり、独学での英語学習期間を経て、ニュージーランドへの留学を決めました。

## Q2: 今回『付加価値のある留学』に参加されたきっかけは？

今回この付加価値のある留学スタディーツアーを勧めてくださった留学カウンセラーの藤巻さんには、ニュージーランドへの留学を決めた時にも学校選びや進路計画などでお世話になりました。その時、私がかもっと英語力をあげたらこんなことも勉強してみたいとお話していた内容を藤巻さんが覚えていてくださり、留学開始から1年以上が経過したこの時期に、私が知りたいことを実際の現場の先生方からお話を伺い、今後私が現地での就職や人脈を広げる足がかりになるのでは？と勧めてくださいました。現在は現地の学校で、ヘルスマネジメントで主はソーシャルワーク、特に、エルダリーの方へのケアをメインで勉強していますが、やはり自分が一番興味のある低学年の子供達への教育にフォーカスを当てて知識を深めたかったのと、卒業後の現地就職進路にもつなげる知識も得たかったので、このスタディーツアーの内容はまさに私が今知りたいことがたくさん詰め込まれていました。プログラムの趣旨のご説明や具体的な見学先の決定を行うまでに何度も相談にのっていただき、私にとって本当に付加価値のあるスタディーツアーの内容を作り上げてくださいましたので、ぜひ参加したいと思い依頼いたしました。



### Q3: 実際に参加したスタディーツアーの内容は？

私が今回いただいた付加価値のあるスタディーツアーの機会で、是非現場の先生方にお話を伺い、知りたいと思っていた内容が幾つかあります。

☆幼稚園、小学校、小学校、幼稚園間の進学に伴う学校を超えた特別支援教育の連携

☆担任の先生と特別支援教育の補助教員との連携

☆ 現地の Individual Education Plan (IEP)についてと  
その活用、機能について

☆NZ の教育現場における特別支援教育が実際にどのように行われているのか。 についてです。

この疑問点に、

- ・現地幼稚園の園長先生
- ・現地小学校の教頭先生
- ・現地小学校の特別支援教育主任の先生
- ・現地小学校、中学校の特別支援教育の補助教員の先生方2名

からお話を実際に伺うことのできる機会を作っていただきました。



### = 具体的にどのようなことを学びましたか？ =

まず、幼稚園と小学校の見学を通してすごく驚いたことの一つに、園児や生徒を見守る大人たちの目が多い点が挙げられます。日本では、教室の中は基本的に1人の先生によって見守られています。こちらでは複数の大人たちの目によって教室全体が見守られていることにとっても驚きました。

幼稚園では40人の園児に対して4人のフルタイムの先生方、そこにさらに複数名のティーチャーズエイド（補助教員の先生方）、さらにボランティアと、実に多くの大人たちの目で見守られています。校外学習に出る時などは、保護者にも呼びかけ、園児3人に対して1人の大人がつくように、水の遊びの時には園児1人に対して必ず1人の大人たちがつくようにルールが決まっているそうです。



小学校では、クラスの中にも担任の先生他に、特別支援が必要な学生のために配置された補助教員の先生と保護者有志によるボランティアが教室に入っていました。補助教員の先生はターゲットとなる特別支援が必要な学生さんの補助のために教室に入っているのですが、それが学生さんにとっての異質感やネガティブな気持ちを生まないように、彼の学習のサポートをしつつも、周りにいる他の学生のお勉強のお手伝いもして、クラス全体の補助教員という振る舞いをされるそうです。



また、地域全体で支援が必要な学生さんをサポートしているという点がとてもよくわかりました。ニュージーランドには、特別支援が必要な学生さんには Individual Education Plan (IEP) という、その学生さんにとってどのようなサポートが必要かをまとめて実践し、その成果や上達、達成具合を評価して次のステップへとつながる取り組みがされているのですが、各学生さんの IEP は各学期ごとに見直しされているそうです。また、その学期に実施された IEP がその学生にとって効果のあるものだったかどうかの判定や次の学期に引き続き同じプログラムを実施するか、またはプログラムを変えて実施するかどうかの判断や協議を“地域の医療チーム”“担任の先生”“ティーチャーズエイド(補助教員)の先生”“保護者”が協議をしてし、学校、家庭、地域の医療チームが連携して特別支援教育に当たっているというお話も大変参考になりました。日本でもこのようなシステムがあればもっと特別教育支援の可能性が広がるのになと思いました。



今回、特別支援教育のための補助教員の先生方、3名の先生たちにお話を伺うことができました。いずれの先生たちも、もともとはご自分のお子さんたちが ADHD という診断をされて、保護者の身分として教室に入り、どうしたら我が子が学校のお勉強をよりわかりやすく理解することができるのかというお気持ちでこの分野に入ってこられた先生だという点がとても興味深かったです。ご自分のお子さんたちが学校を卒業した後、さらに専門家として、特別支援教育のスキルを大学で学び直し、他のたくさんの特別

支援が必要なお子さん達の為の補助教員になった方も少なくないそうです。実際の学校でのサポートの様子を拝見していると、学生さんとの距離がとても近く、サポートが必要な学生さんと、他の健常児の学生さんとを分けずにクラス全体をサポートしていて、それが健常児と障害児が同じ空間で学ぶことを現実化していて、ティーチャーズエイドの先生方の力って本当にすごいなと感じました。

今回の見学を通して、今後自分の仕事にも生かしてゆきたいな。。。と思う点も沢山ありました。例えば、学校での行動から何らかの発達障害が疑われる学生さんの親御さんに、初めてお子さんの発達障害の可能性をお伝えするときの手法です。特別支援教育が必要な学生さんにとってのサポートがオーブ

ンで、社会全体でサポートして行こうという理解が日本に比べてずっと進んでいるニュージーランドにおいても、やはり一番初めに親御さんにお子さんの学習に何らかの障害があることをお伝えするときはとても神経をつかうそうです。親御様からきちんとした理解が得られないままですと完全なサポートが実施できないため、まずは親御様にその可能性を理解していただき、きちんとした検査を受け、きちんとしたサポートを受けていただくための話し合いの席についていただくことが肝心ですが、



しばしば、お御様としては、うちの子には問題ないとして、話し合いの席に着こうとされない親御さんも多いそうです。

そんな時には、まずは ADHD の検査をしましょうというネガティブな話の持ってゆき方ではなく、少し言葉を発するのが遅れるようなので、そのためのサポートをつけて、様子を見ましょう。っというように学生さんや親御さんが前向きな気持ちでサポートを受けられるような話の持ってゆき方をする工夫など、今後の自分の仕事に生かしてゆきたいと思うアイデアを沢山情報共有してもらい、勉強になりました。

## Q4: 付加価値のある留学ステディーツアーの感想は？

大満足でした！自分がこんなことを聞きたいと思っていた以上のお話を聞くことができました。最近、ニュージーランド国内では、小学校や幼稚園への部外者の立ち入りが非常に厳しくなっていると聞き、自分ではきっと訪れることはできなかつたと思いますし、仮に訪れることができたとしても、ここまで歓迎され、色々な知識や情報を提供してくれることはなかつたと思いました。それは常日頃から現地に密着し、日本からの留学生のケアやサポートで、



で、現地の学校と深い信頼感がある NZ Ryugaku Office の皆さんからのご紹介だったからこそ、ここまでの内容を教えてもらえたということ、歓迎されたということをととても感じました。

事前にニュージーランドの幼児教育に関する詳細の手作り資料を作って事前勉強の機会をいただいたり、学校で先生に質問したいことを、あらかじめ打ち合わせした上で、当日満足の行く見学が出来るように事前手配をしてくださっていたことに本当に感謝いたします。ありがとうございました。